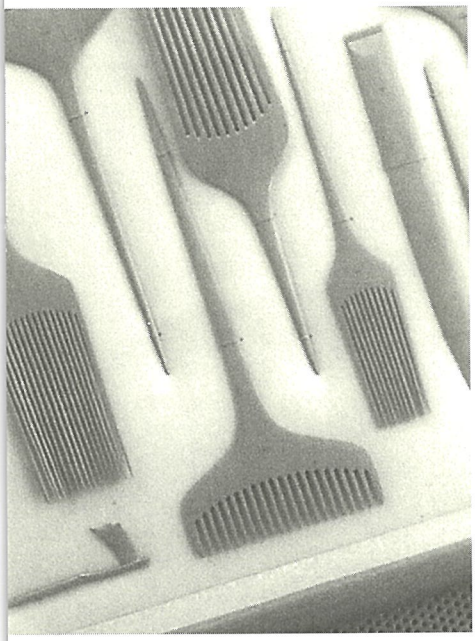
インタビュー

京つげ櫛「十三や」五代目 竹内伸一氏に聞く

（'80年大学工学部機械工学第二学科卒業）

ききて 錢鷗

（大学言語文化教育研究センター助教授）

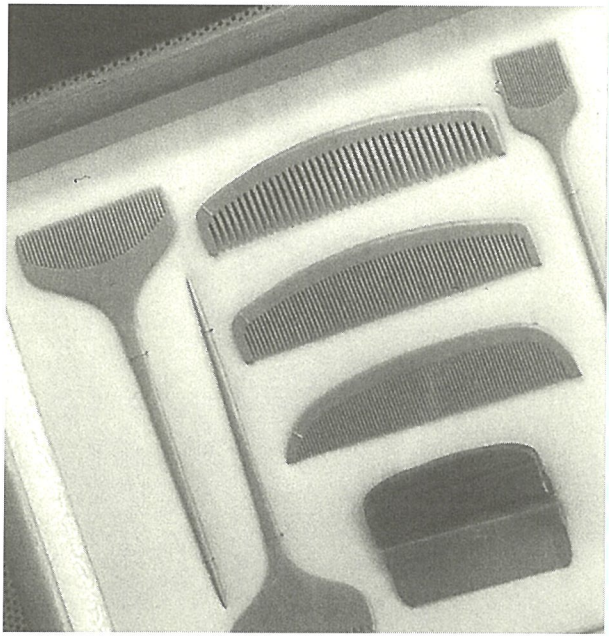


中国影響下に育った、日本の櫛文化

錢　黄楊（つげ）の櫛は、昔から中国の女性に広く親しまれてきました。古代から精巧なものがつくられており、日本の櫛にも少なからず影響を与えたのではないでしょうか。

竹内　櫛に関わらず日本文化は、古代から中国文化の影響を色濃く受けてきました。例えばこの竹製の髪の汚れを取る櫛は、遣唐使の時に伝わったということで、〝唐櫛〟と呼ばれています。現在、日本で唐櫛をつくれる人はなく、店にあるのはすべて中国製です。

錢　懐かしいですね。私は中国の上海出身ですが、こういうの



を私の祖母も持っていました。櫛の一種で、中国ではこれを〝ビーズ〟と呼んでいます。

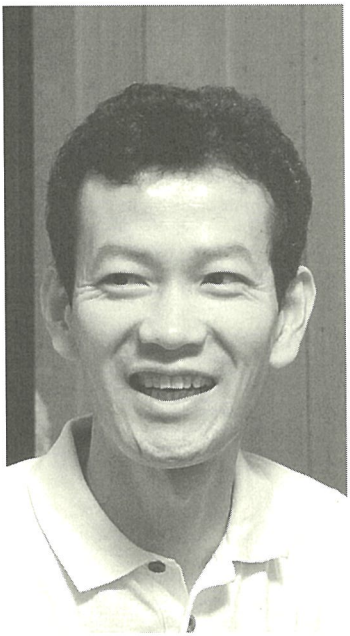
竹内　古代の櫛は、縦櫛で歯の部分が長く、髪をとくためだけでなく、ヘアピンと櫛の二つの機能を持っていたと考えられています。日本では、縄文時代の竹製の櫛が最古の櫛とされています。奈良時代になると中国の唐からのこぎりでひいた唐風の横櫛が伝わっており、『万葉集』に詠まれた「黄楊の小櫛」は黄楊製の横櫛と考えられています。平城宮跡から柞（いす）製の櫛のほかに黄楊製の櫛も発見されています。これらの櫛の形は、今日用いられているものと少しも変わらないですね。

錢　櫛や髪飾りには、いろんな種類がありますね。中国の場合、髪飾りには簪（かんざし）、笄（こうがい）、挿頭花（かざし）、などはあったのですが、髪飾り用の櫛はあまりなかったように思います。髪飾り用の櫛は日本独特のものでしょうか。

竹内　櫛の種類には、結髪をほぐし、解くのに使用する大型で粗目の「解櫛（ときぐし）」、髪についた垢や塵などをすき取る歯の詰まった「梳櫛（すきぐし）」、髪止めや髪飾りに用いる「挿櫛（さしぐし）」などがあります。日本で髪飾りとして特に使われ出したのは、江戸時代からと言われていますが、それ以前にも挿櫛はありました。奈良時代には、大陸の唐から唐風結髪が伝わったようで、『万葉集』にも結髪に関係の深い歌が出ています。しかし、やがて廃れ、平安・鎌倉・室町時代には、古代からの結髪から垂髪の時代になり、髪に直接櫛・簪を挿すことが無くなっていきます。長く垂れた黒髪そのものが美しいとされたんですね。この時代の遺品には梳櫛が多い。それが、江戸時代に入って結髪の形がだんだんと一般庶民にも流行して、日本独自の挿櫛ができてきたんです。

錢　時代とともに、変化してきているのですね。京都とその他の地域の櫛の間に相違点はあるのでしょうか。

竹内　京都と江戸の櫛の形は違います。奈良時代の櫛に近い全体的に丸味をおびた櫛が京櫛です。江戸時代に発達した日本髪がとかしやすい形の櫛を〝鬢櫛（びんぐし）〟と言い、特に江戸で発達してきた櫛の片端がとがったものを〝東形〟と言います。鬢櫛の〝びん〟は、〝べっぴん〟の〝ぴん〟が変化したものと言われています。



竹内伸一さん

錢　京都で伝統の技を引き継いで櫛をつくっているのは、竹内さんお一人ですか。

竹内　叔父など親戚の者といっしょに家内工業で櫛をつくっていますので、厳密に言うと一人ではありません。

錢　手づくりの店は京都で「十三や」さんだけですね。全国的にみてもかなり稀なのでは。

竹内　関西国際空港の近くの貝塚市や和泉市にも櫛の歴史があって、かつては貿易で栄え、櫛職人も多かったと言います。今でも泉南が櫛生産の大きなシェアを占めていると思います。他の地域では、東京に一店あると聞いています。

錢　海外からの注文が舞い込むこともございますか。

竹内　それはありませんね。京都で言いますと、舞妓さんの髪結いさんや歌舞伎の南座の床山さん、そのほか、京人形の結髪用や西陣織の綴（つづれ）織の横糸を整えるための櫛の注文を受けることもあります。

櫛の歯は、手づくりにこだわる

錢　黄楊櫛の黄楊は、どちらのものをお使いですか。

竹内　黄楊は、材質が硬く木目が細かいため古くから櫛材として、また版木や印材として重宝されてきました。現在「十三や」で使っているのは、九州南部の薩摩半島の指宿にある薩摩黄楊です。山に自然に繁殖しているのではなく、農家の人が、肥料を与えて野菜と同じように丹精込めて育てており、一本数十万円もします。毎年九月の乾燥期に根を付けたまま、約四メートルの黄楊をわらで巻いて、昔は貨物列車で、今は車で京都まで運んでもらい、真ん中の芯をくり抜いて製材します。現地で製材してしまうと途中で乾燥して材にひびが入り、使い物にならなくなるのです。

錢　中国にも黄楊がありますが、ほかの地域の黄楊と日本のものとはやはり違うのでしょうか。

竹内　材質が違いますね。たとえばタイ産の黄楊は、材質が硬くねばりがあり、値段が安いので使われることがあります。東南アジアは気候が暖かく、木の発育が早いため、だいたい樹齢十五年が適していますが、薩摩黄楊ですと、樹齢三十年くらいのものを使うことになります。それ以上の樹齢になりますと、樹皮からのシミなどが多くなり、櫛づくりには適さなくなります。

錢　製材してからどのくらい寝かすのですか。

竹内　まず製材した板は、天日で乾燥させます。次に変形しな

いように束ねてしっかり縛り、朝夕三日間にわたっていぶします。そうしますと黄楊材の樹脂分が固まり、地質が締まってひずみが出なくなります。その後、さらに十数年寝かせます。

錢　気の遠くなるような年月ですね。結局、櫛の材料として使えるようになるのは、木の成長期間も入れると、五十年以上かかるということですね。中国でも、家をつくる時は木材を最低十年以上寝かさないとだめだと言いますから、精緻な櫛をつくるとなるとそれだけの年月を要するのですね。

竹内　おっしゃる通りですね。このように十数年寝かせた黄楊で、いよいよ櫛をつくるわけですが、京丸形の櫛の場合ですと、まず櫛の歯を一本ずつのこぎりでひいていきます。そしてできた歯を今度はやすりで研磨し、櫛の両端を切り揃えます。一方、櫛の背の部分は、手に馴染むようにカンナで精妙に削った後、木賊（とくさ）というものを貼り付けた板木賊で櫛の全面を研磨します。その後、水で湿らせた椋（むく）の葉で全面を磨き上げ、さらに棕櫚（しゅろ）の毛を束ねたもので磨き上げてでき上がりです。こうした工程でつくれる櫛の数は、よく頑張って一日数本といったところでしょうか。

錢鷗（せんおう）さん

錢　やはり、でき映えの良し悪しは出てきますか。

竹内　どうしても出てきますね。良し悪しは、櫛の歯を一本ずつのこぎりでひいていく時、歯の間隔が均等に並ぶかどうかにかかっていて、いかに均一な櫛目をつくるかが職人の腕の見せ所といっても過言ではありません。

錢　竹内家の家訓に「心で挽くな、手で挽くな。闇夜に霜が降るが如く」とあるそうですが、精神状態によって、向く日、向かない日はありますか。

竹内　いつも無心でひくように心がけていますが、なかなか難しい。いろいろなことを考えて、集中できない日がどうしても出てきます。そんな時は無理に集中しようと試みず、のこぎりで歯を立てていくような重要な工程は避けて、まずは簡単な作業などをして心を静めるようにしています。

錢　竹内さんは、工学部機械工学科のご出身ですが、伝統工芸の中にも機械が持ち込まれることについては、どうお考えですか。

竹内　伝統工芸といえども、機械化の波は避けて通れないと思います。私自身も、以前は輪切りにするのに大きなのこぎりで切っていたものも今は電動のこぎりで切っています。

錢　伝統工芸の職人の方には、いろいろなタイプの方がいらっしゃるとお聞きしました。全行程を手作業でする人がいれば、工程の中で肝心な部分だけを伝統の技法を用いる人もいる。

「十三や（じゅうさん）」
京都市下京区四条通寺町東入る13
http://www.kyoto-shijo.or.jp/13ya/

竹内　私は後者の方ですね。機械でできるところはできるだけ機械を使っていきたい。年々体力も落ちていくことですし（笑）。製材というのは結構力がいるもので、機械を利用すると短時間で、しかも楽に作業が進みます。

錢　ご自身の手で行う場合と、機械を用いる場合の差がでるのはどんなケースですか。

竹内　木というのは、年輪や木目によって、硬い部分と柔らかい部分があります。機械には、やはりその微妙な差異が感じられない。一方、自分の手でひいていると木の硬さの変化が微妙ですが感じられる。そうした違いを感じながらひいた歯の方が、機械でひいたものより均質性では優れています。

錢　なるほど。しかし、現代人は教えられないかぎり、なかなかその細やかな良さの見分けができないのでは。

竹内　私もそこまで違いを追求していくことについて、時々迷いを感じてしまいます。しかし、手づくりにこだわる姿勢だけは持ち続けていたいものです。

大学時代は、航空部でグライダーを飛ばしていた

錢　大学卒業後、東京の大手スーパーへお勤めのところ、お父様に懇願されて家業をお継ぎになったそうですね。

竹内　男兄弟はいなかったので、「頼むから、継いでくれ」と（笑）。その父も十年後に他界し、三十七歳で五代目を継ぎました。

錢　竹内さんには、後継者はいらっしゃるのでしょうか。

竹内　息子はいますがどうなるのかなあ（笑）。長男は、中学生になったばかりですし、次男はまだ小学校の五年生です。

錢　やはり後を継いで欲しいという気持ちはありますか。

竹内　できることなら自然に継いでもらいたいです。親が泣き

ついたり、無理に継がせるということはできるだけ避けたいものです（笑）。

錢　もし娘さんがいたら、どうされたでしょうね。

竹内　どうなんでしょうか。私の妹は全然興味をもっていなかったようですし、親も勧めませんでした。櫛職人にあまり女性はいないと思います。それは、櫛づくりには力仕事が多かったからで、機械化が進むとそれも変わっていくかもしれませんね。

錢　現代中国は、改革開放政策で新しい技術を積極的に取り入れています。竹内さんのように機械工学の技術を持ちながら、伝統工芸の家業を継ぐことは、現代の中国では考えられません。

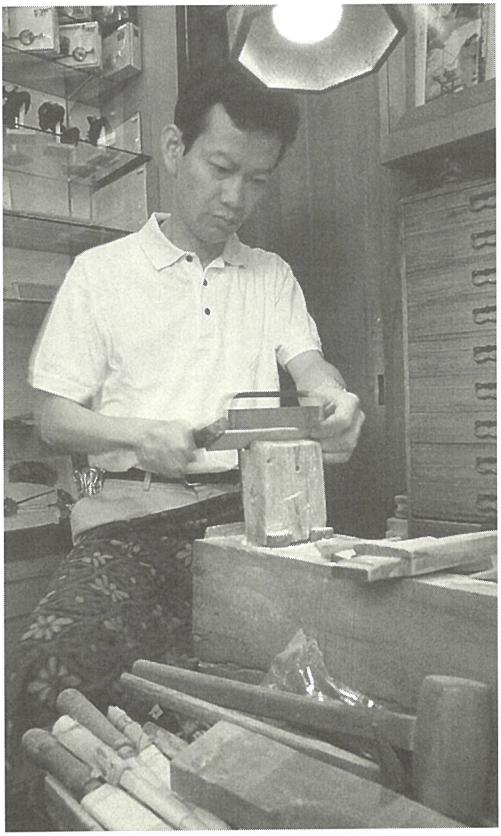
竹内　父の時代くらいまでは、物心がついた時から目で覚え体で覚えていた。だから「大学なんか行っていたら、仕事はできない」というのが父の考え方でした。

錢　でも竹内さん自身はどうなのでしょう。工学部で学んだことが何らかの形で生かされているのでは。

竹内　一つ役に立ったといえば、大学で製図を描いたり、旋盤を使う実習をしていたので、櫛の掃除用のクリーナーの図面は自分で描いてメーカーに発注しています。

錢　大学時代の一番の思い出は。

竹内　勉強はあまりしませんでしたね。航空部に入っていたので、グライダーで飛ぶことにひたすら情熱を注いでいました。メンテナンスが大変でしたが、本当に楽しかった。



細く長く櫛の良さを伝え守っていきたい

錢　日本の若者は、大抵ブラシを使っていますね。黄楊などの木製櫛とブラシの違いを挙げるとすればどうでしょう。

竹内　黄楊の櫛は、ブラシと違って静電気が起きません。プラスチック製のブラシは石油を化学的に処理しなくてはいけませんが、木の櫛は天然木のまま使えるので環境負荷は少なくてすみます。また、木の櫛は地肌に届いて痛い反面、マッサージ効果や育毛効果があり、毛髪の健康という点で優れていると言えます。

錢　中国でも、木や甲類などの櫛を、毎日三百回くらい頭皮にあててとくと、育毛にいいと言われています。今でも太極拳と同じぐらい実行されています。特に中年の男性の間で、人気があるようです（笑）。

竹内　私もできるだけ、その効能をお客様に伝えるようにしています。

錢　現代社会において、伝統文化は大きな栄養素というべき側面を持っています。伝統をしっかり継承する一方で、現代生活の中でそれをどのように生かしていくかを考える。例えば、私は本を読む時に、髪止めとしてカチューシャを使っていますが、代わりに髪止め用の櫛があればと思います。伝統と現代の接点について、竹内さんはどのようにお考えでしょう。

竹内　櫛の歴史は何万年前の旧石器時代に遡ります。今の櫛の形になってから千年以上が経ち、今後も無くなることはまず考えられません。その櫛の文化を細く長く、伝えていくことは大切かもしれませんが、昔の人々が櫛を髪止めとしても使っていたように、現代に合う櫛の使い方を探究してみるのも面白い試みです。もし時間が許せば、考えてみたいですね。

錢　二十年に一回行われる伊勢神宮の遷宮の御神宝の一つに櫛筐（くしばこ）があります。竹内家では代々その櫛づくりを担当されてきたと伺いましたが。

竹内　「十三や」の歴史は百二十六年、そのなかで、今まで三回櫛筐を奉納してきました。第二次世界大戦後の昭和二十八年頃と、昭和四十八年頃です。最近では、平成五年に納めていますが、父は、「最初に納めた櫛はできが悪く、恥ずかしかった」と言っていましたね。「年月が経ると、つくった当時は正確な歯も狂ってくる。なぜこんな風に歯が狂ってくるのかその原因を真剣に考えた」と語って、素材選びがいかに大切かを教えてくれました。古い櫛は、伊勢神宮の美術館でご覧いただけるので、一度覗いてみてください。

錢　今度は、竹内さんが奉納される番ですね。素材の選択は進んでいるのですか。

竹内　平成二十五年の予定ですから、十二年も先の話になります。その頃は、どうなっているでしょうね（笑）。

錢　中国も古い歴史と伝統を持つ国です。改革開放で新しいものに目が向いていますが、それでも人々は伝統工芸品が大好きで、お祝いやプレゼントでは伝統工芸品を贈るケースが多いようです。竹内さんの櫛のような日本の伝統工芸も、ぜひ中国にご紹介いただきたいものです。

（二〇〇一年六月一一日「十三や」にて収録）